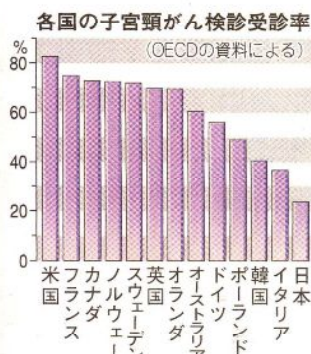




国内で毎年八千人の女性が新たに患者と診断され、二千五百人が命を落とす「子宮頸がん」。最近は特に二十―三十代の若い患者が急増し、死亡率も高まっている。しかし世界では、子宮頸がんは既に予防可能な病気というのが常識だ。

子宮頸がん 予防 立ち遅れる日本

原因の大半はウィルス感染であると解明され、検診ではがんになる前の異常まで発見できる。感染を防ぐワクチン接種の導入も各国に広がっている。一方、日本の現状はどうだろう。検診受診率は20%程度と低迷し、ワクチン也未承認。専門家は撲滅できるがんなのに、日本は立ち遅れている。

低い検診受診率

「私は不運にも子宮全摘術を受けました。私のような人間がいなくなるように、ぜひ検診を受けてください」

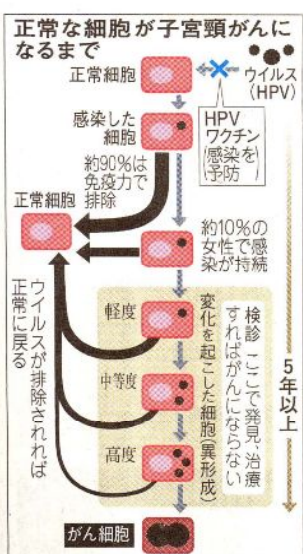
診察の低さだ。経済協力開発機構（OECD）のデータでは欧米諸国が軒並み70～80％台なのに、日本は20％をわずかに超える程度。特に近年、若

この春都内で開かれた子宮頸がん予防の啓発イベント。自身の闘病体験をつづった著書「子宮会議」を朗読した俳優の洞口依子さんは訴えた。

い層での低下が著しい
「検診の重要性が国民に周知されていない。行政は本気で受診率向上に取り組んでいない」と、自治医大の今野良教授は

欧米は70—80%

今、日本の専門家が最
も頭を痛めるのが検診受
年、女性約千人を対象に
行った調査では、検診を



子宮頸がん予防の啓発イベントで、自著「子宮会議」を朗読する俳優の洞口さん（東京都千代田区）

ワクチンも未承認

定期的に受けない理由の上位に「面倒」「時間が合わない」「費用が掛かる」が並んだ。今野教授は「検診が有効だと知っていれば、こんな理由を挙げないはず」とみる。

子宮頸がんの原因のほぼすべてはヒトパピローウイルス（HPV）。性交渉で感染するが、実はごくありふれたウイルスで、性交経験がある大人であれば80%の人が一度は感染するという。

「HPV検査を」

女性の場合、HPVは子宮の入り口（頸部）に取り付く。ただ、90%の人では免疫力でウイルスが排除される。残る10%の人で感染が長期間持続し、異形成と呼ばれる細胞の異常が進行する。こ

の間もウイルス排除の可能性はあるが、運悪く自然治癒しなかったごく一部の人ががんが生じる。

検診は細胞を採取して顕微鏡で調べる。異形成の段階で治療すれば、子宮を摘出しないで完治できる。欧米ではウイルスを直接検出するHPV検査も普及。従来の細胞診との併用で、中等度異形成以上の病変を100%発見できるという。

「検診受診率は80%が目標。検診の精度向上や費用対効果の観点からH₂PV検査の早急導入も必要」と今野教授は話す。

ワクチンは現在、世界で二社二製品が流通し、約百力国で承認されている。性交渉を経験する前の十代前半を中心に接種が推奨され、公費負担を実施する国も多いが、日本は未承認のままだ。

金沢大の笹川寿之准教授は「ワクチンは無毒で安全。効果は最低六年以上、十年ぐらひは続く。中学で接種し、二十代からHIV検査主体の検診を行うといい。その意義を教育で理解させることが大切」と、子宮頸がん撲滅に意欲を示す。

◆公開健康講座「加齢に伴う目の病気に正しい予防法」
24日午後2時～3時
鳥取市の県健康会会館
鳥取大学医学部の井上正典教授が講演する。無料。
鳥取県医師会 ☎0856-556666
◆市民のためのがん講座
25日午後2時～4時
鳥取市の中区地域センター
広島市の中区地域センター

福祉センター。広島大学
放射線医学研究所の
岡田守人教授が「肺がん
の胸腔鏡手術の進歩」と
題し、NPO法人がん患
者支援ネットワークひろ
しま理事長で放射線科を
専門とする広川裕医師が
「肺がんの画像診断法と
放射線治療」について講
演する。受講料13000
円。同ネット8008222
(9)1033。

◆ストーマケア相談会 講演会 25日午後11時、広島市の西区民文芸センター。人工肛門・人工ぼうこうに関する相互に医師や看護師たち3人が応じる。講演会もある。無料。日本オストミヤ協会広島支部 ☎0822(874)3803。

けんこう掲示板

注意

眠りたくても眠れないのは非常に怖いものですが、ホルモンの分泌異常によつて強い眠気や寝つけないナルコレプシーなど深刻な病気もあります。「眠気なんか」などと思わず、早急にご相談下さい。

婦人科疾患の定期検診 20—30代、7割が受けず

20—30代の女性の7割は、乳がんや子宮がんなど婦人科疾患の定期検診を受けていないことが、診断薬・機器メーカーのロシュ・ダイアグノスティックス社のインターネット調査で分かった。

20歳から39歳まで5歳刻みで各150人ずつ計600人の女性が対象。定期的な検診の受診率は全体では28%。年代別では「20—24歳」18%、「25—29歳」22%、「30—34歳」33%、「35—39歳」37%で、低年齢層ほど低かった。

婦人科疾患の知識の有無を尋ねると、54%が「持っている」と回答。しかし、若い患者の急増が問題となっている子宮頸がんについて、原因がウイルス感染であることを知っていた人はわずか25%で、具体的知識の乏しさが浮き彫りになった。

くらし**こづま****お父さんへ**

お父さん、お元気ですか。あなたが紫雲に乗って永遠の旅立ちをして、早いもので一年が来ようとしています。そちらの居心地は、いかがですか。まな娘との三十年ぶりの再会は、いかがでしたか。父娘で楽しく過ごしていますか。

自分は元気だと自負していたあなたが突然、病気の宣告を受け、病と闘うことになり、大変ショックを受けましたね。絶対、病気には負けたいと二人で力を合わせて頑張りました。努力のかいもなく、わずか五カ月で、帰らぬ人となりました。

広島市東区

主婦 小野 智枝美 67歳

四十六年間に半月足りない結婚生活。まな娘との死別など、いろいろなことを思い巡らせています。よくケンカもしたけど、今思えば、とっても幸せでした。本当に長い間、ありがとうございました。

お父さん、今年もわが家の庭には、赤いボタンの花が咲きました。夢の中でもいいから、ボタンの花を見に帰ってきてください。スリッパをそろえて待っています。

今は孫たちのおかげで、やっと少しずつ落ち着きを取り戻しつつあります。私も必ず、お父さんのそばに参りますが、もう少しだけ時間をください。孫三人の成長を見届けたいのです。楽しい孫のお話がたくさんできるように頑張りますので、雲の上から応援してくださいね。